

「心豊かに、生きる力をはぐくむ教育の研究」

基礎・基本の定着～個と集団をつなぎ、学び合う生徒の育成を意図して～

I 研究の内容

本校の立地は峡東地区の代表地域の一つである塩山の中心に位置し、商業地域や郊外に農業地域が広がる甲州の鎌倉といわれる歴史と文化に満ちた地域である。子どもたちの教育環境も地域ごとに異なり、父母の教育への考え方も多種多様であるが、学校に対する期待は大きいものがある。ここ数年学校経営基盤が安定し、より良いものを求める心、より文化的で価値のあるものを求めようとする心、また日常生活の積み重ねを大切にすることを柱に、教育活動全般にわたりそれらをより強固なものにしてきた。

このような経緯に沿いながら、本校の大きな課題である「個々の生徒の学力向上」の研究を数年来進めてきており、その成果も確実に上がってきている。その上に立ち、「個」の伸長を意図した上で「集団」のレベルアップを図っていくことに重点を置き、数年の研究が重ねられてきた。「クラスにいると楽しい」「自分はクラスメートから認められている」という意識は、何より学習に対する前向きな気持ちにつながる。また、学級や学年など、共に学ぶ仲間との関係を大切に、学び合い、伸びあうことができる「学びの共同体」を大切にしたい授業や諸活動の充実が、今以上に大切であると考えてきた。

学校は学ぶところであるという全教職員の共通意識のもと、授業規律や生活習慣の確立、学びに向かう上での基盤を身につけさせることを第一に取り組んできた。「時間を守る」「あいさつをする」「人の話をしっかり聞く」「家庭学習にしっかり取り組む」などは集団活動を展開する前提である。そういった基盤に対して、教職員の共通理解から共通実践へ指導がなされており、今年度もその継続とさらなる発展・工夫を図っていった。こうした中、昨年度までの研究を引き継ぎ、「学校力」をさらに高める方策を今年度の研究の方向性として提示してきた。そして生徒一人ひとりが「自分が好き、仲間が好き、塩中が好き」になるための研究を今年度も意図し計画した。

1. 学びの主体となる生徒の「質的」向上 2. 各教科における現状の把握とそれに伴う指導方法の改善 3. 意欲的に学ぶ集団づくり
以上の視点に基づき、本主題を設定し研究を進めてきた。

II 研究の具体的内容と方法

- 1 学びの主体となる生徒の「質的」向上に関わって
 - (1) 学力向上の取り組み(家庭学習の習慣化と「ステップアップノート」の活用)
 - (2) 道徳教育の充実による生徒の情操の育成
 - (3) 国語力向上の取り組みの継続
- 2 各教科における現状の把握とそれに伴う指導方法の改善
 - (1) CRT・NRT検査の活用による生徒の実態把握と指導方法の改善
 - (2) 実技教科における指導目標の明確化
 - (3) 評価の改善
- 3 意欲的に学ぶ集団づくり
 - (1) 学びの場としての基本となる授業規律のいっそうの確立
 - (2) 楽しい学校生活を送るためのアンケート(h-QU)の実施と分析・活用
 - (3) 話し合い活動の活性化 ～話し合いのルール(塩中方式)の確立へ～
 - (4) ソーシャルスキル、構成的グループエンカウンターを利用した集団づくり
 - (5) 2回の「学びの集会」を企画し、学ぶことの意義を再確認する

4 研究授業の実施

研究の検証の場として研究授業を6回実施した。

- 1 学期：・藤原 祐喜教諭 (全校集会 特活；学びの集会) 初任研
梶原 貴
・丹澤 一浩教諭 (3年1組 理科；生物の殖え方) 初任研
- 2 学期：・平井 成二教諭 (2年3組 英語；接続詞) 初任研
・天野秀太郎教諭 (2年2組 数学；平行と合同) 初任研
- 3 学期：・澤邊裕美子教諭 (3年1組 社会；これからの福祉と生活環境) 新採用
・中村 健太教諭 (2年1組 理科；化学変化と分子原子) 新採用

※初任研；本年度 峡東教育事務所管内 初任者研修 実習校研修会 提供授業

III 成果と課題 (職員アンケートより)

1 学びの主体となる生徒の「質的」向上に関わって

成果

- ・ステップアップノートの活用を継続したことで、家庭学習の定着に効果があったと思う。
- ・2学期の授業参観で全クラス道徳を実施したことで、意識が高まった。
- ・全担任で毎日「デイリーライフ(連絡帳形式)」にコメントを入れることで、生徒の国語力(書く力)が徐々に向上した。
- ・授業規律の確立は、「授業評価シート」を生徒会活動と連携する中で活用できて効果的だった。今後も継続したい。

課題

- ・授業のあいさつも日常のあいさつも、状態は悪くないが、より上を目指したい。

2 各教科における現状の把握とそれに伴う指導方法の改善

成果

- ・CRT NRTを毎年継続的に分析することで、課題傾向が分かり、指導にすぐ役立つことができた。
- ・初任研の授業を提供することで、授業で生徒を伸ばすという意識を再度確認できた。
- ・多田孝志先生(目白大学 外国語学部教授) にアドバイスをいただく中で、本校の方向性が間違っていないことが確認できた。

課題

- ・シラバスの活用と教科部会の時間確保が少なかった。

3 意欲的に学ぶ集団づくり

成果

- ・h-QUの分析に「K-13法」を用いることで、分析・活用の仕方が分かり、自分のクラスに生かすことが出来た。
- ・生徒総会や学びの集会での話し合い活動で、全校で統一したスタイルで話し合い活動が出来て、大変スムーズで機能的だった。
- ・「学びの集会」では、地域の「わだつみ平和文庫」を題材にしたことで“学びたくても学べなかった”先人の思いを、生徒がより深く考える絶好の機会となり、教育的価値と継続して取り扱っていくことの大切さを強く感じた。

課題

- ・やや取り組む内容が多く、今後いくつかに絞っていく方がよいかと思う。

(研究主任 梶原 貴)